

平成26年度 新発田・北蒲体育部 活動報告

部長 高澤 元

1 研究主題

「学習指導要領の趣旨を踏まえた体育学習の在り方について」

2 研究主題設定の意図

学習指導要領の高学年「ボール運動」領域のゴール型にはサッカーが例示してある。サッカーは主に下肢を使ってボールを扱う種目なので技能の習得が難しい。したがって、運動の特性である「2つのチームが入り交じってボールを奪い合い、パスやドリブルなどで相手の守りをかわしてボールを近くまで運び、シュートして点を取ること」を児童に十分味わわせることも困難である。そこで、全ての児童にゲーム場面でシュートをして点をとる楽しさを味わわせたいという願いから、場や人数、ルール等を工夫し、授業研究を通して検証した。

3 事業の実際

○第1回小教研専門部会「活動計画立案」 4月10日（木） 猿橋小学校

○第2回小教研専門部会「演習」 6月13日（金） 外ヶ輪小学校

アドバイザー 須貝 信夫 教頭（加治川小学校）

内容 「サッカーの授業について語る」～ワールドカフェの手法を用いて～

○第3回小教研専門部会「授業研究」 11月14日（金） 猿橋小学校

単元名 3年「ボール運動～サッカー～」

授業者 姉崎 謙 教諭（猿橋小学校）

指導者 須貝 信夫 教頭（加治川小学校）



<概略>

研究授業では、5年生の児童が、チームで協力し、シュート場面を作り出す動きを考えながらゲームをすることをねらいとしていた。ねらい達成のために、サッカーのゲーム場面におけるプレーの優先順位を記した原則を表にまとめる、特定の児童が得点を決めたときの得点を変える「ラッキーパーソン」、ゴール前中央付近に守備側プレーヤーが侵入できない「フリーゾーン」を設ける等の手立てを行った。子どもたちの様子から、どの子も生き生きとゲームに取り組む姿が見られた。

協議会では、作戦を考えるために設けたフリーゾーンを児童が意識してゲームに取り組んでいる様子が見られなかったこと等、授業を通して明らかになった課題に対する意見が多数出された。

指導者からは、より作戦を意識するためのルールや用具の工夫、場の設定について具体的に指導していただいた。

4 成果と課題

「サッカー」という技能習得の難しいゴール型の運動を、高学年の体育授業でどのように扱うのかについて、ファシリテーション、授業研究を通して具体的に学ぶことができた。授業研究で明らかになった課題をもとに、各学校でさらに実践を重ね、サッカーおよびゴール型の運動・ゲームの充実につなげていく。